



伊地知文庫
文庫20
400



け物語五十四帖ふよのせと名るり其故いけ物語作
事ふするれ事ふいわれま又昔あること事ま成る
かと新めりてつ事ありとせんいけ物語の桐壺の御門朱
雀院冷泉院三代延喜集平天曆の御門朱
里光源氏西交左大臣高明公の太宰府ふらうま
よみまらふらけ外源氏の君れた遷ふらうらう周
ら且東征し終る事白樂天の事我朝よと菅原相
野相公を御云のぬりし法よまらう是の事ありと
一ふく小物よありまらう事限らうとされ五十四帖い巻あ
ゆ物とふれまらうらうらうとまらう物あつたの

らうまらう一部の名ふらうらう天台ふらうにふらう中
あり亦有亦空といけ物語あらう事のうらうと春
とそその二巻の名とまらう五十四帖の名ふらうらうと
あらいけ物語ふらう中下らうらうの初らうらう事
中のもらあれたらうらう花子の夢よ胡蝶とらうらうと
又胡蝶と花みと成らうらうらうらういけ物語あらうの夢
とらうらうらうらうはあふらうの今のかはらうらうと定らう
とらうらうのうらうらうらうらうらうらうのあらう
らうらうらういけ系式部の筆下らうらうの文あらうらうらうらう

桐壺卷三十二歳ニテノ事アルニカラハ三十四十五此ニテノ事ノ事
物語ニテ見ナシ但桐壺ノ末ノ詞ト此卷ノ初ノ詞ト三年ノ事ハコト
再花ニ源氏十六歳夏ノ事アリ此卷ハ序分ニアラハ一部ニカシキ也
桐壺卷ハ其前トアリ

あつた酒の味はさき
うららの宮の御
後より大いなる
あつた酒の味はさき
うららの宮の御
後より大いなる
あつた酒の味はさき
うららの宮の御
後より大いなる
あつた酒の味はさき
うららの宮の御
後より大いなる

あつた酒の味はさき
うららの宮の御
後より大いなる
あつた酒の味はさき
うららの宮の御
後より大いなる
あつた酒の味はさき
うららの宮の御
後より大いなる
あつた酒の味はさき
うららの宮の御
後より大いなる

やえ雨傘の物語の序のり

わさくしあらしとくれ終りすまの日本記響響
治轄チカクくクと書り又番長ヤサキとすの字ありシカク響シカクと書く
也とす運ウツ承シヤク治チ天下テノカとくともり又順シヤクの和名
ふフ攘シヤクありとす古今長言チキニチニ忠孝チウキヤウの録ありとす
もモとわやしとありとすシヤクとありとすシヤクとありとす
と心ありと顯シヤク胎シヤク古今の注ふシヤクとあり伊勢物語
もモとありとすシヤクとありとすシヤクとありとす
あり船垣フナヅメの假名の序ありとすシヤクとありとす
とありとすシヤクとありとすシヤクとありとすシヤクとありとす

かあといふ義也又とれくといふ心ありとす
け説くといふありとすシヤクとありとすシヤクとありとすシヤクとありとすシヤク
聚ツクといふありとすシヤクとありとすシヤクとありとすシヤクとありとすシヤク
義也番長ヤサキとありとすシヤクとありとすシヤクとありとすシヤクとありとすシヤク
へヘとありとすシヤクとありとすシヤクとありとすシヤクとありとすシヤク
者シヤクといふありとすシヤクとありとすシヤクとありとすシヤクとありとすシヤク
也といふありとすシヤクとありとすシヤクとありとすシヤクとありとすシヤク
とありとすシヤクとありとすシヤクとありとすシヤクとありとすシヤク
されといふありとすシヤクとありとすシヤクとありとすシヤクとありとすシヤク
つありといふありとすシヤクとありとすシヤクとありとすシヤクとありとすシヤク

源氏の外ふか〜〜

是、種性さかろくあゝ人の千のまゝを
海まひつむか〜〜
とらつ〜のあゝは儀也いれぬは有武部
〜いゝあゝつむ諸ろか〜
そんてきすら〜のさひふ〜
すん〜物は〜武部〜
〜思ひ〜
〜免物〜
とらつ〜
とらつ〜

君と源氏のさまや、葵の上の父のたのむ

源氏のさかろくあゝ人の千のまゝを
源氏のさかろくあゝ人の千のまゝを
源氏のさかろくあゝ人の千のまゝを
源氏のさかろくあゝ人の千のまゝを
源氏のさかろくあゝ人の千のまゝを

源氏のさかろくあゝ人の千のまゝを
源氏のさかろくあゝ人の千のまゝを
源氏のさかろくあゝ人の千のまゝを
源氏のさかろくあゝ人の千のまゝを
源氏のさかろくあゝ人の千のまゝを

源氏のさかろくあゝ人の千のまゝを
源氏のさかろくあゝ人の千のまゝを
源氏のさかろくあゝ人の千のまゝを
源氏のさかろくあゝ人の千のまゝを
源氏のさかろくあゝ人の千のまゝを

一

一

はれたちのついでに上はなりのしてマラ成りくちりくちりして終るくちり
のうらまはつたりわらむらつるの世よはなまてかろくちりつらつらつら
こころのあつたむらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら
つらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら
つらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら
つらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら
つらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら

心より悔ちり世の中はまつりいこちつらつらつらつらつらつらつらつら
天下の政はた大政官とくこればつらつらつらつらつらつらつらつらつら
万機の勢なりつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら
つらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら
つらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら
つらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら

忠臣君のまらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら
民のあつたつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら

つらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら

吳王好劍客ヲシカシテシカシクハシカシク百姓多瘡痍シカシクシカシク楚王好細腰カシカシクシカシク宮中

多カシカシク餓死カシカシク上カシカシク之カシカシク好カシカシク下カシカシク必カシカシク從カシカシク

大業のあつたつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら

たきつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら

上カシカシク念カシカシク淳カシカシク德カシカシク以カシカシク途カシカシク其カシカシク下カシカシク々カシカシク懐カシカシク忠カシカシク信カシカシク以カシカシク事カシカシク其カシカシク下カシカシク

まのりきふつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら
あひつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら
いあつたつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら

そふつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら

あつたつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら

Handwritten text in cursive Japanese style, likely a letter or document. The text is written vertically from right to left across the page. It begins with a large character '下' (Shimo) on the right side. The script is dense and fluid, characteristic of the 'sōsho' style. There are several large characters at the end of the lines, possibly serving as section markers or initials.

Handwritten text in cursive Japanese style, continuing from the previous page. The text is written vertically from right to left. It begins with a large character '上' (Ue) on the right side. The script is consistent with the previous page, showing a high level of calligraphic skill. There are several large characters at the end of the lines, similar to the first page.

のよすうとさふまへにふしめしそへうらうら

本武鳥頭君達小語るらん一は辰はくもさか

るちやんくたのめさしあじこつなめり

スウキョウノチヨ 其振一向行悟去永頓施日中亮 永世日中亮 頓日日中亮

たてのさそひのすすしとてい古き ちやんくたのめさしあじこつなめり

まへにふしめしそへうらうら

是は夫性ひふしのかまのあつらひのくつなめり

とるふしふしと後びつなめりやいしあぢなめり

らふしと後びつなめりやいしあぢなめり

らふしと後びつなめりやいしあぢなめり

らふしと後びつなめりやいしあぢなめり

らふしと後びつなめりやいしあぢなめり

らふしと後びつなめりやいしあぢなめり

らふしと後びつなめりやいしあぢなめり

らふしと後びつなめりやいしあぢなめり

らふしと後びつなめりやいしあぢなめり

らふしと後びつなめりやいしあぢなめり

らふしと後びつなめりやいしあぢなめり

らふしと後びつなめりやいしあぢなめり

らふしと後びつなめりやいしあぢなめり

文選才一編 綾こころなり

あはれいよのほつりしはなかりあるわがまをさか
しはなかりのよしにさかむ

えんぶ豊やんぶらり物くらちてつらとよむ事

よもかきしむるまをのくしてははれぬく今も

まをさかむらぶつりあまのまをさかむらぶつり

ここのあはれりつ平次よまをさかむらぶつり

らあはれりてあまのまをさかむらぶつり

らひのまをさかむらぶつり

是は伊勢物語小業平のさぶあつ女

是は伊勢物語小業平のさぶあつ女

はあはれりつ平次よまをさかむらぶつり

あはれりつ平次よまをさかむらぶつり

あはれりつ平次よまをさかむらぶつり

あはれりつ平次よまをさかむらぶつり

あはれりつ平次よまをさかむらぶつり

あはれりつ平次よまをさかむらぶつり

あはれりつ平次よまをさかむらぶつり

あはれりつ平次よまをさかむらぶつり

あはれりつ平次よまをさかむらぶつり

あはれりつ平次よまをさかむらぶつり

あはれりつ平次よまをさかむらぶつり

とてとりて三巻のゆふ一巻のゆすのてしき女のて中根の解開
須善根如海延如葉同連よとのつし信解品華草菊品中々々論説の
述成後託也次同縁託一周の化城喻品では品過去久遠劫大通智勝佛と
云如來のは花以説給ふ法きく一人の中は思慮の思ひて小意以
修めせりつり又釋尊の説法以同て思慮の聲同くさるる因縁
とてきり下根の千二百人よ次中下後託一法以法理以直よとて
いぬんはりてちてさゆりて因縁以てて法三因のていぬぬの
物語の作りさぬよあひあひあり世俗文字の業相を待語められたる
讚佛之の因縁は輪の縁とするて下の詞は持りて身つてのりの
師のせりてりてりてきりて女人のをりてとていふとてりてりてり

木のりのゆつこのり物法はゆせて所らり
きりてり藤野のりてりてりその物とてりてり
らぬいよのりてりてりてりてりてり
りてりてりてりてりてりてり
てりてりてりてりてりてり
或人よそのりてりてりてりてりてり
はりてりてりてりてりてりてり

あすのりてりてりてりてりてり
又或人よあつて申してゆりてりてりてり
人の心もてりてりてりてりてり
あつてりてりてりてりてりてり
あつてりてりてりてりてりてり
まればりてりてりてりてりてり
文字てり馬のつりてりてりてり
あつてりてりてりてりてり
也木のりの實ありてりてりてり
あつてりてり

大業としていふりてりてり
すりてりてりてりてりてり
あつてりてりてりてりてり

常々まき見たり雷風うららひはぬく

臨時の祭におまつりの事十月中旬也調業い

午の日也内裏へ行くの事也内へ行くの事也

内裏へ招かす事也常々まき見たり

まよはれぬ女の事也幸也まよはれぬ

氏を身の家へ入る事也まよはれぬ

ゆいらくらゝりて女の心はゆく思故に

約する事也

あふくまう
氏からなれ
ふ

火下のつふ
取々残燈背壁臥蕭々暗雨打簷
白女集

女の家の海也ねと

るふりまよまのあつらひ

らふ事也
私衣ノ上ハニタレト
損ニテアケ冬ニナレト

あつらひの錦もこのくも

この大つらふりけり

ひまわりくも物のつらふり

正身 正自身 正貞也
一取は正身としてこの至人法也

中人の事也 左の顔の妻也

氏を女房の事也

お梅様おはなせと申すは

は女にタラ不の事やと申すは三位中将の御方

タラ不の事よ申すは此の御方

なる御方申すは此の御方

かうの御方申すは此の御方

この御方申すは此の御方

よる御方申すは此の御方

見給ふ御方申すは此の御方

御方申すは此の御方

申す御方申すは此の御方

申す御方申すは此の御方

後よ申す御方申すは此の御方

ついで申す御方申すは此の御方

ね申す御方申すは此の御方

御方申すは此の御方

申す御方申すは此の御方

申す御方申すは此の御方

申す御方申すは此の御方

申す御方申すは此の御方

申す御方申すは此の御方

御本垣ね同也

丸のれとの所取の事也二条院とれるす一とら
也とら大目よりいふ所の事は此馬あつた
の夜馬小二条院とら二条東洞院の事なり

乃してよりる神天二神はちとらり
中神日なり又一
夜面天二神也私云
手習よの事とていひつらつたれ井てよとらり
のり忌よりたれ中治の院とて思はて三日を
てとて二三日とての一夜めつらりよの事
或説も天二神十二神将依まらふ事
ことり行不審して或陰陽師おつた
ゆすして日よりたれ神也或日よふ
六ヶ日おつたれつらり神の長
神てとられ長神とていひつらり
全横注云天二神中央十二神時定吉凶
審欣件方忌事古今不遠也
願賀家祭依は性善教作念
六ヶ日也卯日在卯五ヶ日度寅日在
卯五ヶ日辰日在辰

日在乳六ヶ日辰子日在子五ヶ日自美已日至戌
日教之遠事九条院所託云天慶七年正月七日
昨日合八ヶ日開門物忌仍已時
天慶六年正月五日巳卯
天慶六年正月五日巳卯

乃してよりる神天二神はちとらり
手習よの事とていひつらつたれ井てよとらり
のり忌よりたれ中治の院とて思はて三日を
てとて二三日とての一夜めつらりよの事
或説も天二神十二神将依まらふ事
ことり行不審して或陰陽師おつた
ゆすして日よりたれ神也或日よふ
六ヶ日おつたれつらり神の長
神てとられ長神とていひつらり
全横注云天二神中央十二神時定吉凶
審欣件方忌事古今不遠也
願賀家祭依は性善教作念
六ヶ日也卯日在卯五ヶ日度寅日在
卯五ヶ日辰日在辰

Handwritten text at the top of the right page, possibly a title or header.

Main body of handwritten text on the right page, written in a cursive style.

Handwritten text at the bottom of the right page, possibly a signature or date.

Handwritten text at the top of the left page, possibly a title or header.

Main body of handwritten text on the left page, written in a cursive style.

さうのなまきと馬はとくてもあつたはれると
うらまゝとてあつたらぬ東の東のついで書るは
牛持もきりやとてつゝよとの也 空輝の也
か角をばるやとてあつたらぬ東の東のついで書るは
と馬はとくてもあつたらぬ

女はつとてあつたらぬ東の東のついで書るは
と馬はとくてもあつたらぬ東の東のついで書るは
牛持もきりやとてつゝよとの也 空輝の也
か角をばるやとてあつたらぬ東の東のついで書るは
と馬はとくてもあつたらぬ

さうのなまきと馬はとくてもあつたはれると
うらまゝとてあつたらぬ東の東のついで書るは
牛持もきりやとてつゝよとの也 空輝の也
か角をばるやとてあつたらぬ東の東のついで書るは
と馬はとくてもあつたらぬ

さうのなまきと馬はとくてもあつたはれると
うらまゝとてあつたらぬ東の東のついで書るは
牛持もきりやとてつゝよとの也 空輝の也
か角をばるやとてあつたらぬ東の東のついで書るは
と馬はとくてもあつたらぬ

密通の事也

この事あるは
きつり

式部卿の交り振君の交りかへりまうりけり
とす

考のまの源氏の君の伯父也振君の交りかへり
院の事也

くろりまの御人 のいりまの御人注私に格信よ實の御人けりまの御人小氏まの御人
まの御人 まの御人まの御人まの御人まの御人まの御人まの御人まの御人まの御人
まの御人 まの御人まの御人まの御人まの御人まの御人まの御人まの御人

たの御人 たの御人たの御人たの御人たの御人たの御人たの御人たの御人
まの御人 まの御人まの御人まの御人まの御人まの御人まの御人まの御人

この事あるは

是の御家とて催馬楽御家御家御家の御家

まの御人 まの御人まの御人まの御人まの御人まの御人まの御人まの御人
まの御人 まの御人まの御人まの御人まの御人まの御人まの御人まの御人

まの御人 まの御人まの御人まの御人まの御人まの御人まの御人まの御人
まの御人 まの御人まの御人まの御人まの御人まの御人まの御人まの御人

まの御人 まの御人まの御人まの御人まの御人まの御人まの御人まの御人
まの御人 まの御人まの御人まの御人まの御人まの御人まの御人まの御人

まの御人 まの御人まの御人まの御人まの御人まの御人まの御人まの御人
まの御人 まの御人まの御人まの御人まの御人まの御人まの御人まの御人

こまに二つに二君は伊おのりかゝるふれつていふていふあり
 文部省のやゝとてかゝるんといふはまのく人いふまゝのまゝに
 すゝむすゝまゝいふはいふははれていふははれていふははれ
 立のやうなうをばつていふははれていふははれていふははれ
 のうまゝいふははれていふははれていふははれていふははれ
 ちりちりいふははれていふははれていふははれていふははれ
 られていふははれていふははれていふははれていふははれ
 のこゝろいふははれていふははれていふははれていふははれ
 田のりいふははれていふははれていふははれていふははれ
 のうまゝいふははれていふははれていふははれていふははれ

文明十七のおうゝあひのゝ見女子の

たぢふいふははれていふははれていふははれていふははれ

宗祇 五判

